1971.12.23 明治大学新聞

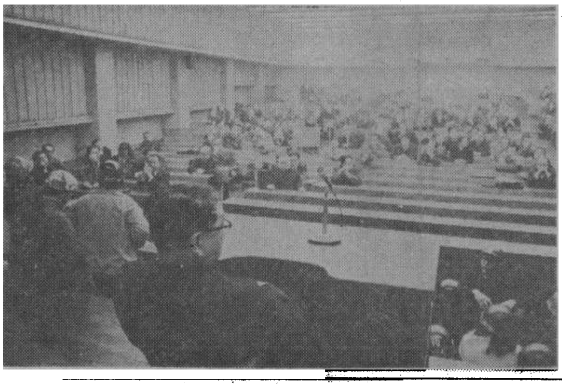
笠原学生部長

1月 全学説明集会開催を確約

23日 連合教授会に介入

受験料値上げ粉砕への突破口

◇この間、当局の「学費値上げ策動――受験料値上げ」に対する、学生会・学苑会両中執による再三再四の「団交」要請にも関わらず、当局は「既定方針通り団交は行なわない」の一片の紙切れをもって黙殺してきた。そして、あくまでも受験料値上げを「学費ではない」として手数料として押しきろうとしている。こうした当局の攻撃に決起した学友三十数名は、二十三日二時頃、それより一時間前から九一番教室で行なわれていた連合教授会に実力介入した。「即時団交要請」にも関わらず議長（春日井薫総長）は「閉会を宣言」。約二〇〇名の教員はそそくさと席を立ち逃亡した。だが笠原学生部長を二時間余に渡って追及。受験料値上げなどの全学説明集会を、一月十四日迄に行なう確約をかち取った。◇



二十三日午後二時頃、黒ヘル・青ヘルの約三〇名の学友が、「受験料値上げ、二部改廃」などに関する問題をめぐり、団交を要求して連合教授会に実力で介入した。

部隊が本館前まで来ると、学生課職員が鉄格子越しに〈のぞき見〉して、一人が会場の九一番教室の方向に〈御注進〉に駆けてゆく。会場前に部隊が到着する頃には、職員があわただしくドアの閉鎖につとめている。シュプレヒコールを叫んでいる間にも職員が続々駆けつけ、部隊が会場に入ろうとするや否や、両脇にあった机を押しドアの前に立ちはだかり、もみ合いとなった。しかし数瞬ののち部隊は会場へ突入。演壇の前に全員が座り込み、一人がアジテーションを始めた。約二〇〇名にのぼる教員は表面的には静かに見守っている。

アジテーションを終え、学友は学長・学部長などの登壇を要請、しばらくの静寂の後、宮崎繁樹教授（法学部）が立ちあがり、「本日の連合教授会は議題が決まっております……」「ナンセンス」「静かにしろ」「議長の責任で決めて貰いたいと思います」「ナンセンス」宮崎教授の発言は学友の激しい反発をかった。

しばらく数人の教員と学友のやりとりが続いた後、二時二〇分頃一言も発さずぶ然として議長席に座っていた春日井薫総長が、突然マイクを手にして「本日の連合教授会は……」それを機に、「閉会された」として参加教員が続々退場しはじめた。これを阻止しようとする学友としばらくもみ合いが続く。

結局、笠原学生部長をとどめただけで、その他主体的に残った数人の教員を「オブザーバー」として笠原学生部長への追及団交が始められた。

受験料値上げに対する学友の追及に対して、笠原学生部長は「受験料は手数料であって、物価の上昇によって止むをえない」とお定まりの回答。また、八日の学生部委員会に提出された、「学費値上げ改訂案」について明らかにしなかったことの追及に、「決定した訳ではないから明らかにする必要はない」と居直り、それでいながら学生部の当局と学生のパイプ役について糾弾されるや、「学生部は民主的にやってきた」と主観的願望を述べることによって切り抜けようとした。

しかし、笠原学生部長が『学費改訂』した場合、学生への説明集会を開く」旨の確約を学苑会中執と行なったことをもとに、「受験料値上げ」に対する説明集会を要求した。笠原教授は「必要ない」との態度を取りつつも、その「学費改訂」の場合と「受験料値上げ」の場合との差違を「社会通念」で乗り切ろうとした。だが、前回の四十二年度学費値上げの際に、一年前から当局が本紙紙上などでその経過を公表してきた事実をもって、今回は「決定されていないので」として一切を秘密裡にすすめてきた当局の姿勢を批判、笠原学生部長の「社会通念」のあいまい性、矛盾を暴露していった。

ここにいたって、笠原学生部長はついに自らの論理の破綻を前にして「全学説明集会」開催の必要性を納得。一月十四日までに「全学説明集会」を行なうことを確約した。

確約は次の通り。

確約書

一、授業料値上げについて。

一、受験料の現実的値上げについて。

一、二部統廃合について。

以上三点を中心とした、総長・学長・理事長以下全理事、大学改革委員会メンバー、二部制度審議会メンバーの出席のもとに、対明大全学生への説明会を一月十四日迄に行なうよう努力する。尚、出席不可能であった場合には、最低私が責任をもって出席し、その経過（出席不可能の理由）と前記三点についての見解を全て公表致します。

但し、説明会のもち方に関しては、学生会・学苑会両中執との予備接渉を行い、前記説明集会の諸条件を決定し、その後説明集会を完全履行する事をここに確約します。

学生会中執殿
学苑会中執殿
昭和四十六年十二月二十三日
明治大学学生部長
笠原長寿 印

一月へ向け戦線構築を

手数料の論理は権力の論理

当局の「受験料値上げ」が明確に学費値上げ策動の布石であり、また、当局がどのように弁明しようが、「受験料値上げ」は「学費値上げ」の一環、一端である。決っして「手数料だから」として片づけられる問題ではあり得ない。

「手数料の論理」は、「権力の論理」に他ならない。

しかし、今回の当局の「学費改訂を見送る」旨を公表しつつ、受験料の「値上げ」を行なった攻撃の巧妙さは、始めから計算されたかのようにまったく効をそうしたものであった。

学生会学生大会のスト権は宙に浮き、学苑会学生大会は意気消沈した。学苑会学生大会は当局の発表の昨日・今日とあって、新たな攻撃に明確なる方針が提起しきれなかった。

だが、十七日の和泉における上屋副学生部長団交には四〇〇名近い学友を結集してかち取られた。しかしながら、焦点がボケてしまったせいか、二十二日の抗議集会は閑散としたものとなった。本校においても、二十日の全学総決起集会は十一日の三〇〇名に比して五〇名程度となり、学生大衆の「学費値上げ反対」の広範な決起は分散化した。闘う戦線すら、迅速に的確に対応しきれなかった。

当局の「学費値上げ策動――受験料値上げ」攻撃に対する、こうした学生側の否定的状況は存在しつつも、連合教授会実力介入団交、そこにおける一月説明集会確約の獲得は、この否定的状況を突破するものとしてあった。

現在の明治における運動が、いまだに学生大衆の自然発生性に依拠しなければならない状況は、今回のように、当局がその攻撃を政治焦点化せしめない近代化攻撃としてくる時、戦線の脆弱性を顕わにする。

当局の「受験料値上げ」攻撃は逆に言えば、より闘う戦線が即時的反発――自然発生性によらず、本質性、〈質〉をもったものとして、学生大衆に肉迫し、決起させ得るか、その、〈質〉を獲得できるかの媒介物、試練としてあるのだ。

今こそ自立的な、永続的な、徹底した大衆運動が問われている時はない。